

妊娠中の歯科治療とくすり



福岡市立こども病院
診療統括部長（周産期センター長）

月森 清巳（つきもり きよみ）

1984年 宮崎医科大学卒業
九州大学医学部産婦人科教室 臨床研修
1993年 九州大学病院周産母子センター 助手
周産期医学、胎児診断治療学専門
ハイリスク妊娠、ハイリスク胎児の周産期管理に従事するとともに、妊娠高血圧症候群の病態解明の研究に取り組む
1994年 九州大学医学博士課程 修了
1997年 九州大学医学部 講師併任
2006年 九州大学病院周産母子センター 講師
2008年 九州大学大学院医学研究院生殖病態生理学 准教授
2009年 福岡市立こども病院 産科科長
2014年 福岡市立こども病院 診療統括部長（周産期センター長）

日本産科婦人科学会・専門医・指導医
日本妊娠高血圧学会・理事
日本周産期新生児医学会・評議員・周産期（母体・胎児）暫定指導医
日本生殖免疫学会・評議員

妊娠中は女性ホルモンの増加により、歯周病原細菌の増殖、唾液の分泌低下をきたすために歯や歯周病が進行しやすい環境になるとされています。さらに、近年、歯周病合併妊婦では、早産、低出生体重児出産、妊娠高血圧腎症、妊娠糖尿病の危険性が高くなることが明らかとなってきました。このような背景から、妊婦が歯科の先生方にお世話になる機会は今後ますます増加するものと思われる。

日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会が共同で作成した産婦人科診療ガイドライン産科編2014においては「妊婦の歯・歯周病については？」というClinical Questionが設けられ、それに対応するAnswerとして「妊娠中は歯科疾患が進行しやすいので、歯・歯周病について相談を受けたら歯科医受診を勧める。（推奨レベルB：実施すること等が勧められる）」と記述されています。さらにその解説中には、妊娠自体は歯科治療の適応を制限しないが、薬剤の胎児への影響が懸念される妊娠初期は緊急性の高い歯科疾患治療に限定すること、また、妊娠中期以降も抗菌剤・消炎鎮痛剤については、胎児に対する安全性の高いものを選択して使用することが望ましいと記述されています。しかし、緊急性の高い歯科疾患ほどX線撮影、観血的な処置や薬剤投与などが必要となる場合が多く、歯科の先生方が催奇形性や胎児毒性について頭を悩まされる場合も少なくないと思われます。

本シンポジウムでは、妊婦に対する歯科治療時の注意点、特にX線撮影と投薬について産科医の立場からお話したいと思います。